

小城三月（小さな街の三月）

蕭 紅

（訳 小林美恵子）

二

翠叔母はその後もよく我が家に来て滞在した。私の継母が呼び寄せたのだ。というのも彼女の妹が婚約してしまったからだ。妹が結婚してしまったら彼女は一人取り残されてしまうことになり、それは彼女にとってつらいことになるだろう。なぜなら彼女の家族は少なかった。六十歳を超え、老いた祖父と、それにもう一人、寡婦になった伯母とその一人娘だけだった。

従姉妹とは本当ならいっしょに遊んで気晴らしができるはずだが、性格があまりに違いすぎて、水と火のように打ち解けず暮らしていた。

従姉妹には私も会ったことがあるが、いつも黒っぽい着物を着て、暗い顔で、一日中母親にくっついて家の中にいた。母親が洗濯をすれば彼女も洗濯をし、母親が泣けば、彼女も泣く。彼女は母といっしょに死んだ父のことを嘆いていたのかもしれないし、家の貧乏を嘆いていたのかもしれない。それは他人には理解できないことだった。

そもそも同じ家に住む女の子なのに、翠叔母たち姉妹は裕福な家のお嬢さんらしく、いっぽう従姉妹は見るからに田舎娘のようだった。この一点が彼女にいつも私の家に来る権利を与えた。

彼女の妹は婚約し、一年後には嫁いだ。その一年間、妹はおおいに豪勢にふるまった。というのも、婚家のほうでは婚約が整うと結納をしたからだ。この街ではもともと大洋票〔張学良政府発行の兌換券〕は使わず、広信公司〔黒龍江省が設立した会社〕の出す兌換券が用いられ、百吊千吊〔「吊」は貨幣の

単位]の価値があった。彼女の妹の結納にはおよそ数万吊が届けられ、妹にとっては大変なことが起こったわけで、今日はこれを買、明日はあれを買、花飾りのブローチを一つ、また一つ、絹の元結いも一卷き、また一卷き、房の垂れたイヤリング、腕時計とさまざまなものがなんでも揃った。街に出かけるたびに、彼女は姉といっしょに行き、今はいつも彼女が車代を払った。姉が払おうとしても、彼女はいろいろ言って払わせず、時には人前で姉が払おうとしても、それでも払わせなかったので、気まずいことになってしまい、姉はいつの間にか一種の権利が奪われたと感じるのだった。

しかし、彼女はいつも寂しさを感じた。彼女と妹はいつだっていっしょだった。家庭環境が寂しい中で、妹とはまるで双子のようだった。それなのに今片方がいなくなり、翠叔母自身も寂しさを感じるだけでなく、彼女の祖父も彼女をかわいそうに思った。

そこで妹が嫁いでから、彼女はあまり家に帰らず、いつも母親の家に行った。時には私の継母が彼女を我が家に迎えにやった。

翠叔母は大変聡明で、大正琴を弾くことができた。それは数年前から中国で流行している、日本の琴の一種だ。彼女は簫や笛も吹くことができた。しかしその琴をひくことがむしろ多かった。我が家の伯父は、毎日夕飯後、必ず私たちといっしょにそれらの楽器を演奏した。笛や簫、日本の琴、オルガン、月琴やそのほかの何か洋琴などだ。本物の西洋楽器とか、そういったものは一つもなかったのだが。

そんなふうになぎやかに楽しんでいると翠叔母も来て加わった。翠叔母は一曲弾き、私たちはすぐに合奏した。すると、みんなは、毎日毎日練習している曲の中に、一つの新しいスタイルが加わるのを感じるのだった。そこですぐに私たちはさらに頑張って、笛を吹いているものは笛の音を特に響かせ、リードをあたかも割れそうに震わせて噴出すように鳴らした。十歳の弟はハモニカを吹き、頭を揺らせ、まるでそのハモニカを飲み込ん

でしまいそうに見えた。彼がどんなふうにも吹いても、もう誰も気にしなかった。みんな突然調子に乗ってきて、まるでこんなふうにもでたらめをした
いだけのようだった。

そしてオルガンを弾くものは弾くほどに速くなり、とうとう速さに手が
ついていけなくなったようで、ただペダルを力まかせに踏み、その音はバ
ンバンと鳴り響き、オルガンをわざとバラバラに壊そうとでもしているか
のようだった。

たしか演奏した曲は「梅花三弄〔梅花を歌う名曲「三弄」は同じ曲調を三度繰り返
すことによる〕」で、どのくらい繰り返して弾いたかわからないが、それでも
誰もやめようとはしなかった。しかし、最後になって本当に気力がなくな
ってしまって、拍子をとることもできず、調子を合わせることもできず、
大笑いのうちにみんな演奏を終えるのだった。

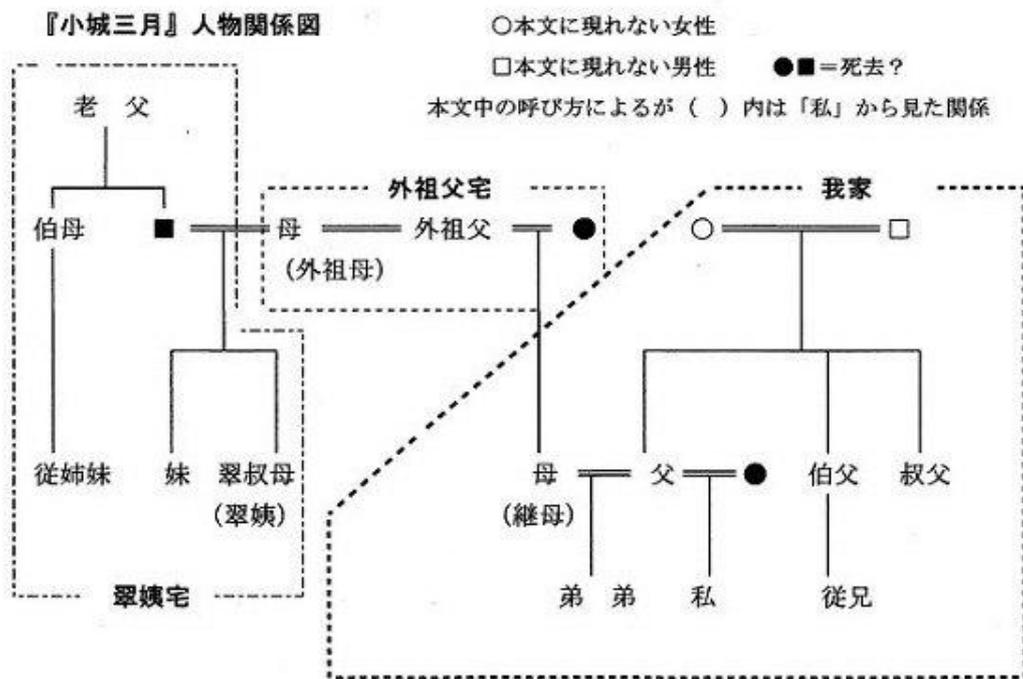
なぜかはわからないが、こんな楽しい調子の中で、誰もがすこし悲しく
なった。楽しみが極まると悲しみが生まれるのかもしれない。私たちは笑
いながら涙を流し、また笑った。

ちょうどそのとき、戸窓のほうを見ると、歩けるようになったばかりの
一番下の弟が、大きな壊れたアコーディオンを背負って演奏に加わりに来
るところだった。

誰もがそのアコーディオンが鳴らないことを知っていたので、それはみ
んなをひどく笑わせた。これでまた楽しくなった。

私の従兄（伯父の息子がピアノが上手だった）は簫が何よりも得意だっ
たが、このとき、簫をおいて、翠叔母に言った。「君も吹いてごらん！」
翠叔母は、でも何も言わず、立ち上がって自分の部屋に駆け込んで行った。
従兄は長いことその部屋の入り口に下がるカーテンを見つめていた。

.....



(中国語原文)

小城三月

萧红

二

翠姨以后也常来我家住着，是我的继母把她接来的。因为她的妹妹订婚了，怕是她一旦结了婚，忽然会剩下她一个人来，使她难过。因为她的家里并没有多少人，只有她的一个六十多岁的老祖父，再就是一个也是寡妇的伯母，带一个女儿。

堂姊妹本该在一起玩耍解闷的，但是因为性格的相差太远，一向是水火不同炉地过着日子。

她的堂姊妹，我见过，永久是穿着深色地衣裳，黑黑的脸，一天到晚陪着母亲坐在屋子里。母亲洗衣裳，她也洗衣裳；母亲哭，她也哭。也许她帮着母亲哭她死去的父亲，也许哭的是她们的家穷。那别人就不晓得了。

本来是一家的女儿，翠姨她们两姊妹却像有钱的人家的小姐，而那个堂姊妹，看上去却像乡下丫头。这一点使她得到常常到我们家里来住的权利。

她的亲妹妹订婚了，再过一年就出嫁了。在这一年中，妹妹大大的阔气了起来，因为婆家那方面一订了婚就来了聘礼。这个城里，从前不用大洋票，而用的使广信公司出的帖子，一百吊一千吊的论。她妹妹的聘礼大概是几万吊，所以她忽然不得了起来，今天买这样，明天买那样，花别针一个又一个的，丝头绳一团一团的，带穗的耳坠子，洋手表，样样都有了。每逢出街的时候，她和她的姐姐一道，现在总是她付车钱了，她的姐姐要付，她却百般的不肯，有时当着人面，姐姐一定要付，妹妹一定不肯，结果闹得很窘，姐姐无形中觉得一种权利被人剥夺了。

但是关于妹妹的订婚，翠姨一点也没有羡慕的心理。妹妹未来的丈夫，她是看过的，没有什么好看，很高，穿着蓝袍子黑马褂，好像商人，又像一个小土绅士。又加上翠姨太年青了，想不到什么丈夫，什么结婚。

因此，虽然妹妹在她的旁边一天比一天丰富起来，妹妹是有钱了，但是妹妹为什么有钱的，她没有考查过。

所以当妹妹尚未离开她之前，她绝对的没有重视“订婚”的事。

就是妹妹已经出嫁了，她也还是没有重视这“订婚”的事。

不过她常常的感到寂寞。她和妹妹出来进去的，因为家庭环境孤寂，竟好像一对双生子似的，而今去了一个，不但翠姨自己觉得单调，就是她的祖父也觉得她可怜。

所以自从她的妹妹嫁了，她就不大回家，总是住在她的母亲的家里。有时我的继母也把她接到我们家里。

翠姨非常聪明，她会弹大正琴，就是前些年所流行在中国的一种日本琴。她还会吹箫或是会吹笛子。不过弹那琴的时候却很多。住在

我家里的時候，我家的伯父，每在晚飯之後必同我們玩這些樂器的。笛子，簫，日本琴，風琴，月琴，還有什麼打琴。真正的西洋的樂器，可一樣也沒有。

在這種正玩得熱鬧的時候，翠姨也來參加了。翠姨彈了一個曲子，和我們大家立刻就配合上了。於是大家都覺得在我們那已經天天鬧熟了的老調子之中，又多了一個新的花樣。於是立刻我們就加倍的努力，正在吹笛子的把笛子吹得特別響，把笛膜振抖得似乎就要爆裂了似的滋滋地叫着。十歲的弟弟在吹口琴，他搖著頭，好像要把那口琴吞下去似的，至於他吹的是什麼調子，已經是沒有人留意了。在大家忽然來了勇氣的時候，似乎只需要這種胡鬧。

而那按風琴的人，因為越按越快，到後來也許是已經找不到琴鍵了，只是那踏腳板越踏越快，踏的嗚嗚地響，好像有意要毀壞了那風琴，而想把風琴撕裂了一般地。

大概所奏的曲子是《梅花三弄》，也不知道接連地彈過了來多少圈，看大家的意思都不想要停下來。不過到了後來，實在是氣力沒有了，找不著拍子的找不著拍子，跟不上調的跟不上調，于是在大笑之中，大家停下來了。

不知為什麼，在這麼快樂的調子裡邊，大家都有點傷心，也許是樂極生悲了，把我們都笑得一邊流著眼淚，一邊還笑。

正在這時候，我們往門窗處一看，我的最小的弟弟，剛會走路，他也背著一個很大的破手風琴來參加了。

誰都知道，那手風琴從來也不會響的。把大家笑死了。在這回得到了快樂。

我的哥哥(伯父的兒子，鋼琴彈得很好)吹簫吹得最好，這時候他放下了簫，對翠姨說：“你來吹吧！”翠姨卻沒有言語，站起身來，跑到自己的屋子去了，我的哥哥，好久好久地看住那帘子。

□□□□□

